

News Letter

2017.01
Vol. 10

Contents

- 新年のご挨拶
- 医学部4年生
キャリア教育講義実施
- 玉樹会レポート

謹賀新年



新年明けましておめでとうございます。
旧年中は格別なご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
本年もより一層の御支援を賜りますよう、センター一同心よりお願い申し上げます。

センター長 藤木 稔
副センター長 松浦 恵子



レポート

医学部4年生

「医師のキャリアとワークライフバランスを考える」の講義が開催されました

11月30日（水）挟間キャンパス臨床中講義室にて、医学部4年生対象に「医師のキャリアとワークライフバランスを考える」と題したキャリア教育の講義が開催されました。

本学では初の試みで、“学生が卒業後、様々なライフイベントや岐路に立たされた時に、自らのキャリアの形成や、ライフとの兼ね合いをどのように選択していくのか”を考えることを目的として取り組みました。

最初に、腫瘍・血液内科の緒方正男先生と産科婦人科の平川東望子先生が、自らの歩んできたキャリアやその過程でのご苦労、また年々増えつつある女性医師に対しての医局のサポートや配慮などをお話いただき、学生は現役医師のリアルなお話に真剣に耳を傾けていました。

その後、学生はチュートリアル室に移動し12のグループに別れて、仕事と育児の両立を目指す共働き夫婦が問題に直面した時に、どのように解決していくかを、提示された2つの事例を基に討論を行いました。

《事例1》夫婦ともに大事な仕事の予定が入っている日に、子どもが熱を出したという設定。

《事例2》妻に海外留学の話が出たが、小さな子供がいる。どうするのが良いかという設定。

グループ毎に事例の問題点、解決策、最善と考える選択と理由についてプロダクトを作成しました。

その後講義室に戻り、グループで話しあった過程と結論を、ロールプレイをしながら発表してもらいました。ロールプレイはグループ毎に大変工夫を凝らしたもので、それぞれ夫婦役のほかにも、両親役であったり、上司役であったり、笑いたっぷりの楽しく、昼ドラ張りの熱演をしてくれたグループもありました。進行係の学生の采配・時間配分も見事でした。

また男女共同参画推進室室長であり、当センターの副センター長である松浦恵子先生による「ワークライフバランスミニ講義」もありました。

質疑応答では、学生から介護についての質問が出たり、留学が妻でなく夫の場合ならこんなに悩むことはないだろうから、そこですでに男女の差が生じているという鋭い指摘まであり、関心の高さを感じました。

講義の前後でとったアンケート結果（以下に一部抜粋）からも、学生は、結婚や育児をしながら仕事やキャリアアップをしていくことを具体的に思い描いたり、考えたりする良い機会になったようです。

今後も、このようなキャリア教育を継続していきたいと考えています。



腫瘍・血液内科 緒方正男先生



産科婦人科 平川東望子先生



グループ討論の様子



ロールプレイ(発表)の様子



ロールプレイ(発表)の様子

レポート

「第26回玉樹会総会」レポート

シンポジウム 8月27日レンブラントホテル「一生活躍するキャリアのために」

基調講演 松浦恵子先生

「女性医師の活躍のために卒業生としてできること」

パネリスト：花田俊勝先生（細胞生物学講座 教授）

花田礼子先生（神経生理学講座 教授）

中田健（附属病院腎臓内科）

長野徳子（附属病院循環器内科）



先日、大分大学医学部の卒業生の同窓会である玉樹会（会長1期生河野義久先生）の第26回総会にて、シンポジウム「一生活躍するキャリアのために」が開催されました。

当女性医療人キャリア支援センター副センター長・男女共同参画推進室長である松浦恵子先生が、基調講演「女性医師の活躍のために卒業生としてできること」を講演され、その後、4人のパネリスト＜花田俊勝先生（細胞生物学講座 教授）、花田礼子先生（神経生理学講座 教授 お二人はご夫妻）、臨床からは、当センターのメンバーである中田健先生（附属病院腎臓内科）と長野徳子先生（附属病院循環器内科）＞で、河野義久先生ご司会のもと、パネルディスカッションが行われました。

講演では、松浦恵子副センター長が、自分のキャリア、この活動に取り組むきっかけや日本の医師、女性医師の働いている現状を述べられた後、当センターのこれまでの支援活動について発表しました。

パネルディスカッションでは、現在子育て真っ最中の花田先生ご夫妻から、夫の立場として俊勝先生から「十分に手伝っていない」と反省の弁を述べられた一方、礼子先生からは「実際に子育てをしてみると、男女の生物学的な違いを感じる事が多々あり、子育てについては男性に女性と同様のことを求めるのは厳しい面もあるのではないかと感じる。例えば、夜中に子供が泣いても男性の場合は目が覚めないとか。子供にとっては母親でないといけない時や事柄もたくさんあることがわかった。また、産後の急激なホルモン変動による体調の変化などは実際に経験してみて、初めて神経内分泌学的、生理学的に実感することも多かった。」と述べられました。長野先生も「現在両親と同じマンションに同居し、支援は受けてはいるが、PTAなど親でないといけない行事もあり、周囲の理解や協力を得て、仕事を継続している。」と述べ、「夫が夜中起きないのは、一緒ですぞ」という言葉は、男性には耳の痛い話でした。

会場には、河野先生、松浦先生の部活の後輩にあたる学生さん達もたくさん参加されており、女子学生から「子育てが負担に感じることはありませんか？」という質問がありましたが、花田礼子先生から「確かに、大変だと感じることもあるが、子育てをする中でむしろ公私ともに時間的マネジメント力が向上し、物事の捉え方が柔軟に変わった面もある。」と答えられていました。

他にも会場からは、経営者の立場として子育て経験のある医師の、「（さまざまな工夫により）仕事の面ではトラブルになることは少ない」というご意見や、河野先生の病院での子育て中の女医さんに対する支援や、ご自身のエピソードとして「（自分は）イクメンではなかったが、現在はもっぱらイクジイをしている」というお話もありました。

最後に、松浦副センター長が、未来のために本活動をしていること、最終的には、女性だけの支援にとどまらず、介護やご自身の病気、外国籍の方など様々な方が活躍できる環境作り「ダイバーシティ」を目指していること。そのために一番不可欠なことは、「『相手を思いやる気持ち』それがすべてに通じる」という話でまとめられました。

1時間30分という時間があっという間で話し足りないくらいでしたが、大変貴重な機会を作っていただいた河野先生はじめ、関係の皆様にご感謝申し上げます。



松浦恵子先生



(左から)花田俊勝先生・花田礼子先生・中田健先生・長野徳子先生